

海鳴りの石

——ニティナ城の巻——

山口 華・作

君島美知子・絵

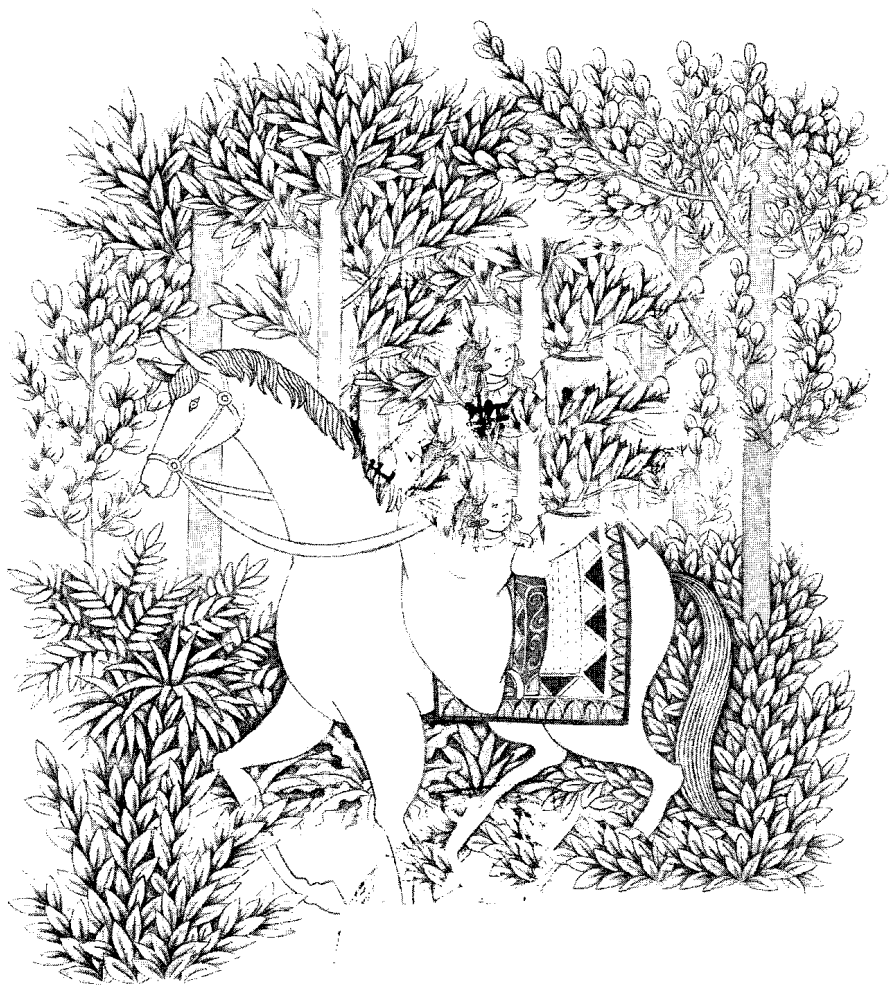


海鳴りの石

——ニティナ城の巻——

山口 華・作

君島美知子・絵



山口 華 (やまぐち はな)

1966年7月14日生

京都大学文学部英文科卒。卒論は J.R.R. トールキンの『指輪物語』

日本児童文芸家協会会員

〒659 芦屋市三条町17-21-401

君島美知子 (きみしま みちこ)

埼玉県浦和市生

多摩美術大学デザイン科卒業

デザインスタジオ勤務の後フリーのイラストレーター

絵本に「雪女」「つるのおんがえし」「にじでなわとび」

NDC990

山口 華

東京 教育出版センター 1991

300頁 19.4cm 海鳴りの石—エディナ城の巻—

©本シリーズの掲載作品について、転載、付曲その他に利用する場合は、著者と教育出版センター著作権部までおしらせ下さい。

グリーンファンタジー 1

1991年10月28日初版発行

海鳴りの石 エディナ城の巻

定価 1400円

(本体1359円)

(〒350)

著 者——山口 華©

企 画——銀の鈴社

編 集 〒101 東京都千代田区西神田 2-3-2

ハタノビル 2F 電話 03(3265)5717

発 行——教育出版センター

〒101 東京都千代田区神田神保町 2-46

電話 03(3239)5438 FAX03(3261)6419

印 刷——KMS

ISBN4-7632-4550-3 C8397 P1400E 落丁・乱丁本はお取り替え致します

海鳴りの石

——ニディナ城の巻——

•

も く じ

プロローグ—— Ⅰ

1. 海越え来たる者—— 15
 2. 黒衣の君と星姫と—— 45
 3. 角笛月—— 89
 4. 明暗—— 115
 5. 船乗り女—— 147
 6. ルオルンの物語—— 179
 7. 嵐—— 211
 8. 燃えさかる炎—— 241
- エピローグ—— 287

プロローグ



「こりや、ひどいや」

僕が言うと、親父は顔をしかめた。

「こんな主人公、許せないよなあ、エミー？」

ガラ刷りを振り回しながら、僕はガールフレンドのエミー（あだ名だ）に同意を求めた。

「さあ、どうかしら？」

エミーはフッフといたずらっぽく笑った。

「だっていくら惚れたとはいえ、だぜ。お姫さまを城からさらって、危険な目にあわせる。結局彼女は殺され、自分はさっさと雲がくれ。勝手な男だ。こりや絶対、失敗作だな」

「そんな言い方しちゃ……、きつと売れるわ。もう続編にかかってらっしゃるんでしょ？」

「それがしよっぱなで行きづまっちまったんだろ。ほんの二、三枚で挫折。こんな最低の主人公の生まれかわりとやらを主役にするからさ。もつと発想の転換をしなくちゃ」

「だからそのために旅行に出かけるんだ」

親父がだみ声で言った。

「そのうち驚け、『英雄ファンタジイ』『歌姫神の島』、ベストセラーでたちまち増刷」ということになるから」

「いい年して、調子がいいんだから」

「つべこべ言うとう学資を出してやらんぞ」

お決まりの捨てゼリフを残し、親父はサムソナイトをゴロゴロ転がしつつ部屋を出ていった。僕とエミーは目を合わせてこっそり笑顔をつくった。行きづまるとふいと旅に出るのは、親父のいつものパターンなのだ。

エミーが親父の後を追っていった後、僕はあくび混じりに親父の机に近づいた。書きかけの原稿や、弟からの手紙が放りだされたままになっている。弟のことを考えて、僕は少し胸が痛んだ。玄関からエミーの声が聞こえてくる。弟がエミーと僕を避けるように家を出て一人暮らしを始めたのは、ついこの間のことだ。僕が休暇で家に戻った時、彼はエミーを失い、僕は彼女を得たのだった。しかたのない成りゆきだった。僕ら兄弟も、そしてむろんエミーも、傷つけあうつもりはなかったのに……

僕は溜息をついて手紙を押しやり、かわりに原稿を手にとった。挫折した続編の題は『海鳴りの石』。僕はまた悪口のためでも見つけて気をまぎらそうと、それを読んだ。

化粧室ではまだ子供のような王女が、着つけに忙しかった。

「ねえ、もうちよつと裾をあげて：そう、そのくらい。さ、早くかがつてちょうだい」
北方人のドレスはロイエクという。上等の夏のロイエクは一種の絹で、ひだのたくさんあるワンピースになっている。小間使いは裾を内側へ折り返して、骨製の待針でどんどんとめだした。

「それで、と。ミエッティ、髪。いつものリボンでくくつてね。耳のリボンも」

すぐにロイエクの裾はかがられ、くるくるした髪はくしけずられ、淡い黄色のリボンがつけられた。黒髪の民は耳に穴をあけて金の輪や宝石をつけるが、北方人は、南から来た人々でもそんなことはしない。細い糸をよつたりボンを耳に結ぶ方がずっと上品だと思っているからだ。

「あ、動かないで：」

侍女のミエッティは耳たぶの下の結び目を整えようとしながら言った。

「ええ：動かないから、早くね」

じつとしたまま、王女は姿見を見つめた。

上品でもありお転婆てんぱそうでもある、とがった顎あごと大きな目。紅をさすまでもなく、頬ほは赤みを帯びていた。今年十六歳になる、年下の王女サティ・ウィンだった。

「さ、サティさま、おしまいですわ」

「ありがとう。あらっ、鐘！」

そう言つて彼女はくるとふり返つた。姉のルウィンが待つていた。サティ・ウィンと同じ栗色の髪は肩から背中へと波うつて、さしこむ西日を反射している。おっとりした丸顔、妹のよりさらに大きな瞳。その名の由来の通り、月の女神ルイもかくやという美しさ。

「お姉さまもとつてもすてき。エオルンが来るんですものねえ！」

この名はルウィンには特別な意味を持つらしく、彼女は急に頬を赤くして、

「まあサティ！」

指をつきだし、おどす真似をした。その時、

「もう八点鐘ですわよ」

と、控室から教育係のアヌア夫人が顔を出した。五十歳近いのだが、目もとはすつきりと皺しわもなく、北方人風に結いあげた髪は黒くつややかだった。毎日、香油でそれは丹念に手入れするのだ。この女性は二人の王女の母親がわりだった。

「今行くわ」

サティ・ウインは姉と一緒に部屋を出た。

丘の上に立つ緑の城からは、二重の城壁や城門、広場、都の家々などが見渡せたが、王女たちはそちらとは反対の奥庭へ向かった。日没前の強い日ざしが一行を正面から照らし、石畳に長い長い影を落としている。祭の夜を前に、森と建物に囲まれた奥庭は王の現れるのを待っていた。

「でもシャトーレイ公やリファインがいないと寂しいわね。どうして遅れたのかしら、リファインのお兄さまの船。三日前までに港に入るって言ってたのに。今頃シャトーレイ公もリファインも港で待ちくたびれてるわ、きつと」

「仕方ないわ、サティ。オーロラ帝国からここまで遠いんですもの。それに夏至の頃は潮流に不思議が多いそうよ。でも祭に間に合わなかったのは残念ね」

「リファインのお兄さまってどんな人かしら。リファインに似てるかしら。シャトーレイ公に二人も男の子がいたなんて、最近まで知らなかったわ。姉さまは？」

「私もよ。私と同年なんですって。来年には成人式ね。きつと式をこちらで挙げるために里親のところから呼び戻すのよ」

「なるほど、そうなの。…あ、お父さまだわ。エオルンも来たわよ」

王女たちはおしゃべりをやめて、父のレープス王や重臣たちが近づくのを待った。その中にはミルザム島から来た有力者ウィルム大公と息子のエオルンもいた。

やがて太陽はくれないに燃えながら遠い山の向こうに沈み、空は真つ赤に染まつた。

丘を覆うサティエスの森は黒々とその輪郭を浮きあがらせ、辺りはたそがれる。王侯貴族の見守る中、白い長衣の神女たちが森蔭の墓所の方から松明たいまつを持って行進すると、夏至の太陽から作つた火のともる松明を掲げた神官らが迎えた。松明の列は吸いこまれるように神殿に入っていく。その後から王と王女たち、供の者が続いた。

墓所の古い火と太陽の新しい火が炉に捧げられると、炎がぱつと燃えあがつて、人々の顔を先ほどの夕陽のように照らした。

サティ・ウィンは隣で姉が緊張して体を硬くしているのに気づいた。ルウィンは神殿の儀式をあまり好いていない。おごそかすぎて怖いようだというのだ。けれどサティ・ウィンは、ほの暗い空間も白衣の神女や神官たちも、そして祭壇上に置かれた雄牛の頭蓋骨でできた打鐘うちかね（チャイム）の祭器も、特に気味悪いとも怖いとも思わなかった。

祭司がつぶやくような声で歌を唱えながら進みでた。祭壇にはレープスの神宝へ雄牛の打鐘。それは巨大な雪野牛の頭骨で、新月のように湾曲した二本の角の間になめらか

な短い棒状のへびき石」が三つ取りつけてあった。角には彫刻がほどこされ、空っぽの眼窩の間には神々のしるしが刻んである。この美しい楽器はレープスの守り神だったが、三つの石の間隔はまちまちで、歯抜けのように見えた。

「あの石、数が足りないの？」

と、幼い頃サティ・ウインはまだ元氣だった母に訊いたことがある。母はうなずいた。

「昔、海賊王たちが攻めてきて、六つの石のうち三つがなくなってしまったの。へ海鳴りの石」は奪われ、へ嵐の石」とへ天の石」は女神さまのもとへ行ったのよ」

サティ・ウインは、その話を聞いた幼い時からの習慣で、六つのひびき石が全部揃っている打鐘を想像してみた。すると、いつもそうなのだが、急に頭の中がぱあっと開けて何か芽を出すような、花が開くような不思議な気持ちができるのだった。

祭司は左の短い石を珊瑚の槌で叩いた。コーン、コン、コーンと澄んだ明るい音が壁や天井に反響する。それはへ太陽のひびき石」で、音が響く間に神女が右手で空中に流れるようなへ力の文字」を書き、祭壇に蜜と緑の枝を供えた。収穫や害虫について願かけをした後、祭司は言った。

「願わくはへ新しき王」来たりて欠けたる石を打鐘に戻し給わんことを」

王と王女たちが神殿を出ると、本来なら次は王の従兄のシャトーレイ公一家の番だが、彼らがいらない今日は重臣たちが続いた。ミルザム島の大領主ウィルム大公と息子のエオルンは黒髪の民なので、このような北方人の儀式には最後に加わった。

儀式の後で雄牛の打鐘は祭壇ごと神官たちの手で担ぎだされ、内門の外まで運ばれていった。広場には都の人々が金持ちから乞食まで集まっており、中央にかがり火のための薪が積まれている。王は緊張してやたらと咳払いをしつつ、

「へうたう潮流」に洗われるこの地にも、太陽祭の昼が再び巡り、星祭の夜が再び訪れた。すべての害なすものを払う火を焚き、いざ歌月の最後の宵を楽しまん」

と宣言した。神女が神殿の火からうつした松明を薪にかざし、神官は打鐘を鳴らした。人々は勢いよく燃えたった火に歓声をあげ、さっそく音楽と歌と御馳走が始まった。

僕はホッと息をついて原稿を置いた。これでは本当にほんの書きだした。第一、前作のヒーローの生まれ変わりとかいう主人公の登場がまだではないか。誉めるもけなすもあつたもんじゃない、と僕は机に背を向けた。

「おじさま、行っちゃったわよ。ちゃんと見送ってあげなきゃだめじゃない」

エミーが戻つて来て言った。

「いいのさ。勝手に出かけたんだもの。それより晩飯食いにいこうぜ。チビ助も誘つてさ」
外に出てガレージに行くと、西空が真っ赤な夕焼けだった。隣の家に住んでいる高校生のチビ助は親父の本のファンで、僕たち相手にその話ばかりしていた。

「『歌姫神の島』の中ではさ、敵役の海賊サザもかつこよかったよなあ。主人公の槍にグッサリ刺されても、『俺の奪った宝の石は渡さんぞ。槍先を染めし我が血にかけて、炎の女神に祈願する！ この海鳴りの石を手にとする者に呪いあれ！』するとゴーツと火が燃えたって……」

「そんなセリフ、あつたっけ？」

僕の言葉にチビ助はがつくりした顔になった。

「最後の最後におじさまが書き直してた所よ」

エミーが言ったので僕は思い出した。

「そういや親父、締め切り真際にうんうん言ってたな。主人公の年の計算をし直したり」

「年の計算？ どうして？」

エミーが訊くとチビ助は勢いこんで、

「サザは自分の血にかけて炎の女神を呼びだしたろ。主人公の〈黒衣の君〉がもし成人前だったら、彼も同じように命とひきかえに女神に頼んで、海鳴りの石を取り戻せたかもしれない。ところが彼は成人式で歌姫神に血の誓いをたてた後だった。だから炎に包まれた石を奪い返せなかったんだ」

「へーえ、親父もひねくれてるな」

「ちえつ、いやだなあ。石を取り返したら、そこで黒衣の君は死んじやうじゃないか。主人公が死なずにいずこへとも知れず去っていくところがいいんだぜ」

チビ助の思い入れは相当のようだ。

結局、物語の話に終始した食事の後、僕は一人、家に戻った。おいてきぼりをくった親父の茶色いスパニエル犬ゴッド・ファーザー（なぜだか知らないが親父がこう命名したのだ）が、さみしげな灰色の目をして出迎えてくれる。やれやれ、親父と弟と三人で久々にのんびり過ごそうと思っていたのに、休暇の半ばにもならないうちに二人ともいなくなつてしまい、何だか拍子抜けだった。さして広くもない家の中も妙にがらんと居心地が悪い。さっさと寝てしまおうか。そうだ、親父のベッドは大きくて上等だから拝借してやろう。

親父の枕はかすかにポマードの匂いがしたが、スプリングはすばらしいし、寝心地は上々

だ。ゴッド・ファーザーのやつが側で鼻をふんふんいわせるのを聞きながら、僕は目を閉じ、半分もう眠った気分になっていた。原稿を読んだせいか、チビ助の熱弁のせいか、親父の物語が頭の中を行ったり来たりした。ほんの書き始めで、何に行きづまったのだろう。これから出てくる予定の主人公か？

そう思った時どういうわけか、主人公の顔が見えるような気がした。夢を見ているのか。でもこうして考えている意識はある。これは親父の枕にあてられた妄想だろうか。すると今度は、電話の受話器から聞こえる声のように、誰かが話しているのが聞こえた。

「伝説の海鳴りの石でもあればな。誰が操っているのか知らぬが、こんな夏至の魔法、うち破ってやれるのに」

「宝の石は別の時や別の世界に連れていってくれると言いますからね」

声と共に丸い波紋のイメージが浮かんだ。そして再び主人公。今度はぐっと近づいて、驚いたことに僕に向かって声を出した。

「君、力を貸してくれ」

と彼は言った。さっきの最初の方の声だ。僕はびつくりして、（自分の頭の中を覗くような変な気がしたが）彼をまじまじと見た。親父の描く「北方人」の例にもれず、金髪で青い

目玉のハンサムだ。そう、英雄ファンタジイの主人公なんて大抵こんなもの：筋肉隆々の大男か、白皙美貌はくせきのやさ男なのだ。

「もう三日も遅れている。ニディナでは祭も済んでしまっただろう。迎えに来ているはずの父や弟も港で待っているだろうし」

とするとこの男は、あの原稿の中で王女たちが噂していた人物らしい。なるほど主人公は彼だったのか。

「これ以上待たせるわけにはいかない」

生真面目な顔で彼は言う。親父が執筆を中断してしまったので、出番を控えて彼自身も待たされ困っているようだ。

それにしても奇妙だ。主人公に訴えられたって、まさか僕が書きわけにもいかない。そう言つてやりたかったが、相手は頭の中のイメージだから、話しかけるのも何だか一人芝居みたいで滑稽だ。そうこう思ううちに僕の意識はますます夢うつつになり、主人公氏の顔がまた近づいたように感じられた。

「頼む、力を貸してくれ。成人を前に、父の国レープスに帰るところなんだ。僕の父は王の身内で：僕は世継よつぎになる予定だ。だから僕が無事港に着かないと混乱が：」